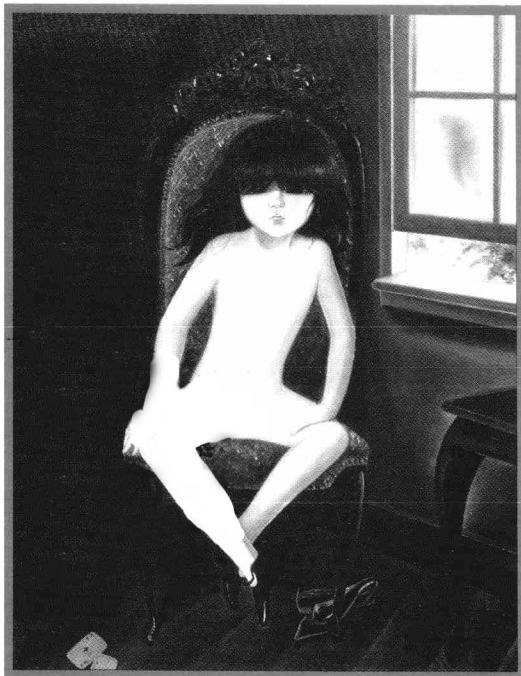


子役の時間 中山千夏



子役の時間



中山千夏

© Ekinatsu Nakayama 1980

Printed in Japan



子役の時間

昭和五十五年六月二十日 第一刷

定価 九八〇円

著者 中山千夏

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 (〇三) 二六五・一二一一

印刷所 凸版印刷

製本所 中島製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

子役の時間
目次

子役の時間

5

ミセスのアフタヌーン

59

羽音

199

装画 上野紀子——CBSソニー出版刊
「わたしと魔術師」より

子役の時間

その子供は、石畳の線を踏むまいとして、不自然な歩きかたをしていた。線と線との間隔が、自然の歩幅につりあわない。一拵おきではちょっときついし、一拵ずつではじれたい。それでも子供はその両方を併用しながら、けっして石畳の線を踏むまいとして歩いていた。

何人もの男や女が、さっさと追い越し、あるいはひょいと体をかわしてすれ違ってゆく。妙な歩きかたをしている子供に関心を向ける者は、ほとんど無い。

今はちょうど学校が退ける時分で、石畳の路は、小学校の門に面している。子供は、教材のつまった大きいショルダー・バッグの重みにあらがって、体を左に傾斜させ、バッグの肩紐はセーターの幾何学模様をゆがめている。

それぞれ用をかかえて街をゆく人々にとって、学校帰りの子供など、少々妙な歩きかたをしていたところで、次に折れるべき街角や、もうすぐ変わりそうな信号の、背景にすぎなかった。

ただ、その子供と危うく衝突しそうになった人々のなかに、軽い印象を受ける者があるにはあった。ひたすら路面ばかりをみつめ、周囲にかまわず足を運ぶ子供の風情は、何か貴重なひらめきを追求しているようにも見えたのだ。

それは奇妙な印象だった。しかし、ほかの雑多な印象の渦から、目立って浮かびあがるほどのものではなかった。子供でも思想するのだろうか——せいぜいそんな問が、答を待つでもなく、軽くかすめて消える程度のものであった。

たしかに、石畳の線を踏まずに歩く、という運動は、子供の頭の一隅を刺激して動かした。だがそれは、思考と呼べるほどはつきりした動きではなくて、むしろ、腸の蠕動運動に似たものであった。一枰おきではちょっときついし、一枰ずつではじれたい。自然な歩幅につりあわぬ線を、踏むまいとして歩く子供の体は、自分に何の配慮もなくそこにある世界の、どうにも身に合わない愛想の無さを、一足ごとに確認する。それは、乳であったか抱擁であったか、とにかく、おのれの欲求を初めて拒絶された時以来、ずっと子供の毎日に、なぜか確実に織り込まれている様々な不快の源へ、探りを入れる作業にほかならなかった。

気味の悪い感覚が生じた。それでいて、手放したくない感覚だった。一步そうしてしまった以上、次の一步も線を踏むわけにゆかず、そうすれば、また次の一步も線をよけなければならぬものなのであった。

ささげ持った器いっぱいの水のように、その感覚は歩調につれて、たぶたと揺れた。感覚のなかで浮き沈みしているのは、新しい記憶だった。今日、学校で起きた出来事が、何枚もの情景になって、感覚の揺れにたゆとうている。たいていの情景が、陽焼けしたひとりの小柄な少年を

中心に、広がっていた。学校での彼女の時間は、すべてその少年によって区切られていた。

アラタ君が、机の角をナイフで削りながら、大声で返事をした時、先生は黒い紙ばさみを人差し指でなぞりながら出欠を取っていた。アラタ君が、ちょっと消ゴム貸して、と手をのばした時、誰かが黒板に計算の答を書き込んでいた。アラタ君が真白な三角巾とマスクの間から眼だけ出して、給食の大鍋を運んできた時、教室のなかは食器のぶつかりあう音でやかましかった。

ふと、子供は足を止めた。そして、かすかな動揺を表情に表わしながら、歩道に接した車道の路面へ視線を投げた。子供は路面をみつめた。砕けちった自動車の厚いガラスが、路面から吹き出した粘りある結晶のようにひとつひとつ陽の光を反射して、そこに放置されている。子供は、たった今、自分の胸に打ち当たった一枚の情景と、それが巻き起こしたおのれの動揺とを見極めようとし、実際には一心に、きらきらした結晶の群を見つめていた。輝きが瞳の焦点を狂わせ、さらに光を増して視野一杯に広がった。

午後の校庭だった。校庭と街を分かつ緑色の金網が、通りをへだてた洋品店やクラブ、ひんぱんに走り抜ける自動車、時おり校庭をのぞき込みながら過ぎゆく人々などに、薄いフィルターをかけていた。金網に巻き込まれた校庭でだけ、本物の色と形を持った出来事が進行していた。

体操の時間に、女子の番を待って、男の子たちのマラソンを見学していた時だ。誰を応援しようかな、みんなの気をひくように呉服屋のメグミが言い出した。すぐにクリーニング店のジュンコが、あら、あなたはスギモト君に決まってるんでしょ、とからかい口調で応答し、わあ、それはミッチちゃんよ、ねえ、とメグミが笑ってミチコをひじで突く真似をした。料理屋のミチコは、黙したままニヤニヤしながら、横に立っていた子供の腕に自分の腕をまわした。

女同士のなれあった雰囲気は、幼い者たちの間にもすぐ芽生え、それですっかり打ちとけた気分になった子供が、あたしアラタ君が好き、アラタ君ガンバレ、と彼女たちにだけ聞こえるくらいな声をあげた時、それは起こった。

太って丸いメグミの顔が、肩越しに振り返る。腕をからませているミチコのおとなびた顔が、こちらを向く。そのむこうから、念入りに髪を撫でつけたジュンコの顔がのぞく。

一斉に自分を見たそれら同級生の三つの顔が、また一斉に顔を背けて、お互いに短く視線をかわしあい、それからミチコが、ふっと息を吐くまでの情景を、子供はその当時よりも鮮明に思い起こしていた。それが巻き起こした彼女自身の動揺も、その当時より鮮烈だった。

あの時、同級生たちの顔には、はっきりと何かの表情が浮かんでいたが、子供にとって、それは不可解な仮面であった。今日まで子供が身につけてきた言葉では、とうてい名付けることのできない仮面であった。

しかも、その瞬間まで、いともたやすく、まるで自分そのものであるかのように、読み取ることのできていた彼女たちの表情が、突然、理解できなくなったのだ。子供は初めて、自分がいとも他人の表情を読み取っていたのだと意識した。そして、読み取れないことの落ちゆく先を直感し、焦った。

だが、子供が三つの顔を素早く見比べ、何とか表情の意味を読み取ろうと試みる間もなく、彼女たちは視線を交して了解しあい、ミチコが、ふっと息を吐くと、もう彼女たちの表情は不可解な仮面ではなくなっていた。子供は、ただその瞬間が過ぎ去ったことを感じていた。

三人の同級生は、走り出した男の子たちをながめやり、論評を始めていた。ミチコの腕はさっ

きのままに、子供の腕にからんでいた。何事も無かったかのようであった。何も起こらなかったのだ、と子供は思ってもみた。

しかし、どうしてもあの一瞬の前までのように何気なく、ミチコの腕を抱えていることが子供にはできなくなっていた。肌の触れあっている部分から、自分とは全く別の体温が、全く異質の生ぬるさを伝えてくるのが、いやにはっきり感じられる。その生ぬるい柔かなものは、内側に一本の骨を包み込んでおり、それが自分の腕にたまたまひっかかっている、という気がした。子供は不快に耐えた。腕を引いたら、何か起こったとはっきり証明されるようで、不安だったのだ。

あの仮面は一体何を意味していたのか。あの仮面たちは一体何を了解しあっていたのか。そして最後に、ふっと吐き出されたミチコの息は、何の合図だったのだろうか。

答をたたき出そうとでもするように、子供は右のつま先で、左のかかとを蹴り始めた。

いくらかかかとを蹴り続けても、答は出てこなかった。嘲りとも非難とも、どこか違う何かだ、ということしかわからなかった。はっきりしているのは、あの一瞬を引き起こしたのが、直前の自分の言動であり、あの一瞬は自分について何かを語った、ということだけだった。

子供は自分の言動を、あたしアラタ君が好き、アラタ君ガンバレ、と叫んだことを思い返してみるのが、どうしてもそれが、あんなに妙な一瞬を引き起こすようなものには、思えなかった。活発な女の子なら、誰でもしていることだった。ちょっとした機会に、自分がどの少年に思いを寄せているのか表明する。するとみんなは、いろいろなやり方で囁き立てたりからかったりする。一日のうち何回も、子供はそんな場面を見てきた。転校してきたばかりの頃は、前の学校ではあり得なかったその大胆で開けっ広げな大人びたやりとり、少なからず面喰ったものだ。

ひと月ふた月とたつうちに、そんなやりとりを見ても驚かなくなった。違和感が残っていたが、それが東京でのやり方ならば受け入れようという気持が子供にはあった。望んだ転校ではなかったが、ここへ来てしまった以上、素早くここに溶け込むべきだ、と子供の本能が判断していた。だからこそ、今日の午後、女同士の打ちとけた気分に残りの違和感を押し切らせて、子供は少年に声援を送ったのだ。あたしアラタ君が好き、アラタ君ガンバレ。

突然、子供の胸の中で、何かがぼつと燃えあがり、たちまちのうちに体の四方八方へと熱を伝えた。あの時押し切られた違和感が勢い良く起きあがって、内側から子供を揺さぶった。体を固くして熱の波に耐えながら、子供はあの一瞬の意味を悟った。単純なことだった。溶け込むとする子供を、彼女たちは拒否したのだ。当然あるべきからかいや囁し言葉のかわりに、不可解な仮面を見せることで、彼女たちは拒否したのだ。あなたは、私たちとは違うのに、同じ振りをするなんて、と仮面はさきやきあっていた。

熱の波は、どうしようもない恥ずかしさを体中に運んだ。拒否されたことを不当に思う気持は、全くなかった。遅刻や早退の常習者である転入生を、快く遊びの仲間に加え、不慣れなところは教えたり助けたりし、転入生が子役であることには一切ふれようとしない同級生たちに対して、恨みがましい気持など起きようもなかった。子供が何か間違ったことでもない限り、新しい同級生たちは、誰もかれも親切で優しくかった。

そして今日、自分は明らかに間違いを犯したのだ、と子供は思った。彼女たちとは違うのに、同じような振りをする、という間違いを。

子供は足を踏ん張り、両の手を握りしめて、砕け散ったガラスを凝視した。そうして、熱の波

が段々に弱まり、恥ずかしさが鎮まるのを待った。一台の自動車が、頑丈なゴムのタイヤで、ガラスの破片をさらに碎き、はねとばして過ぎた。それを見送るついでのように顔をあげると、子供は自然な足どりで歩き始めた。

もう恥ずかしさは鎮まっていた。あの一瞬も再び感覚の底へ遠のいてゆき、全体にぼんやりと風いだ意識のなかで、子供は前の学校の手強い連中を思い出していた。

子供が初めてテレビに出たのは二年余り前、大阪の民放テレビが開局して間もない頃であった。子役を求めているテレビ局の人間と、子供の両親が懇意にしていた人間とが、たまたま親しかった、というだけがきっかけだった。

ほとんど冗談のようにやってみたテレビ出演は、ディレクターやプロデューサーの興味をひき、次の出演のきっかけになった。次の出演は、またその次の出演のきっかけになり、一年もたつと子供は、ミヤコ蝶々、南都雄二、花菱アチャコ、西条凡児、といった大御所や、森光子、藤田まこと、佐々十郎、大村昆、といった若手の売れっ子たちに混って、テレビ局を駆け巡っていた。

世間での注目を集めるにつれて、子供は学校でも目立たないわけにはゆかなくなった。早退、遅刻、休校が多いという点で、あるいは、受像機を買うのさえ贅沢なテレビに、出演などしている、という点で。

教師や父兄の大方は、そんな子供を不快に思い、それは子供たちにも伝わった。

ことに小さな鉄工所のひとり娘は、腹にすえかねていて、立派な体格と体育優秀の自信を持って女の子たちをとりまとめ、ある日、昼休みのドッジ・ボールから、子供をあからさまに締め出した。子供たちの作法どおり、入れて、と声をかけて遊びに加わろうとした子供の前に立ちはだかる

と、鉄工所のひとり娘はきっぱり拒否したものだ。

「あかん。入れたらへん」

なんでやのん、と狼狽するのを半眼に見降して、

「あんだ、テレビなんか出てなまいきや。うちら、あんだと遊ばんことにしたわ」

そう言い捨てると、成り行きをうかがっていた女の子たちのなかへ戻り、さあ、いくで、と機敏に体を動かし始めた。女の子たちは即座に応じ、何人かがきまりの悪い顔つきで、子供の視線を避けた。子供は、ぼかんとして立っていた。同級生の女の子ほとんど全てが、ドッジ・ボールの四角いコートのなかで動きまわっていた。しかし、コートから出て子供に近付こうとする者は、ひとりもいなかった。誰かの運動靴のつま先で引かれたコートのラインが、いつか本で読んだ魔法陣の線になって、女の子たちを囲い込み、子供の侵入を阻んでいた。しばらくたって、

「ふうん、そうか」

と子供は呟いた。呟いてから、後に続く言葉が何も無いのに気がつく、子供はゆっくりききすをかえし、ぶらぶら歩いて人気^{ひとけ}の無い校舎の裏手まで行って、そこで、短い時間、泣けるだけ泣いた。泣き止んでからも始業ベルが鳴るまでは、校舎の壁に寄りかかり、舌で歯の裏をなぞりながら、ひとりつくねんとしていた。

子供はこの顛末を誰にも訴えはしなかった。両親にすら話さなかった。口惜しくはあっても、どこかで、仲間から外されるのは当然なのだ、という気がした。だからといって、テレビをやめる気は毛頭なかった。子供はもはや、演ずることの魅力にとりつかれていたのだ。むしろ、学校ならやめてもよかったが、両親が許す見込みはない。つまり、この顛末を話したところで、何が